

23 . 醜い少女 (ミンダナオ)

とても昔のこと。つつましい夫と妻がいて、彼らにはたったひとりの子ども、名前をエトゴという女の子がおり、彼らはその子を大変愛していました。

エトゴは大変優しく、思いやりがあり、よく気がつき、誠実で、何でもでき、良く働く少女になって、いつも家の周りのことで母親を助けていました。エトゴにはひとつ問題がありました。彼女は、美しくなかったのです。事実、村のほかの子どもたちは彼女をあざけて、「みにくいやつ。」と呼んでいました。

このことは、エトゴを大変傷つけ、彼女はできるだけ、他の人々と交際するのを避けていました。

毎日、家事をして母を助けた後、エトゴは近くの林へ行って、美しい赤いスイレンでいっぱい池からほど近い、小さく穏やかな空き地にある、大きな木陰の下に座っていました。

そこで、彼女はさえずる鳥たちや、はばたく蝶たちに、大きなギター（ヒガロン）を弾いたり、甘い歌を歌ったりしていました。

この森では、エトゴは安心して、平穩に過ごせました。彼女は新鮮な草の匂いや、さまざまな色の花の香りが好きでした。彼女は、鳥や蝶を友だちと考えていました。それらにとっては、彼女は醜くありませんでした。そうです、この森では、彼女は幸せでした。

ある日、エトゴが家事で母の手伝いを終えた後、いつものように、彼女は林へ楽しそうに向かっていました。

しかし、この特別な日には、エトゴは村からの少女の集団のそばを通りました。少女たちは直ぐに、彼女の容姿を笑い、彼女の名前を呼びました。哀れなエトゴは、少女たちのそばを通り抜ける間、彼女の地味な顔を覆うようにしました。しかし、少女たちは小さな石や、土の塊を取って、無防備のエトゴに投げつけ、その間中、笑っていました。

土にまみれ、石に傷を負って、エトゴは、残酷な少女たちのそばを急いで離れ、彼女は、森の奥深くに走って行きました。

彼女は、好きな林の中の場所に着いてひざまずき、どうして人々が彼女にこのように冷酷なことが

できるのか、理解できないと、大きな声で泣きじゃくりました。全く彼女は誰にも危害を加えたことはありません。彼女は今まで誰にも、悪い言葉を言ったり、悪いことをしたことはありません。

エトゴは、涙ぐんだ目を空に向け、愛するアラーに熱烈な願いをしました。「どうして人々は私をこんなに苦しめるのでしょうか。」彼女は嘆願しました。「私は誰も傷つけたことはありません。私は間違ったことをしたこともありません。私の落ち度ではないことで、どうして仲間はずれのように、懲らしめられなければならないのでしょうか。」

エトゴは、頭を抱えました。彼女は目から悲しい涙を拭き取り、また空の方を見ました。「どうぞ、私をこの冷酷な世界から取り去ってください。」彼女は頼みました。「私はもう、この痛みを持ったまま生きてゆけません。どうぞ、こんな残酷な人々から私を守ってください。どうぞ、どうぞ、アラー、私を助けてください。」

アラーは泣きじゃくるエトゴを、慈悲深い心を持って、見ていました。彼女は悲しい生活にうんざりしましたが、アラーは、エトゴが真心からよい行いをする親切な人物であることを知っていました。彼はそのようなすばらしい生活を奪い取ることはできませんでした。

そのかわり、彼はすべての人が彼女を好きになり、もう二度と「醜い」と言わないように、彼女に新しい生活を与えることにしました。その生活では、全ての人が彼女を用いることを見つけ、彼女を必要とするようになるのです。

アラーはエトゴを「ニッパ」椰子の木に変えたのです。

エトゴの必死の祈りは応えられ、その地の人々は、乾いたニッパ椰子を使って、彼らの生活をもっと快適にしました。彼らは椰子を使って彼らの家の、壁と屋根を作りました。

今では、彼女の良さは、フィリピン中に広がりました。そして、誰もニッパ椰子を「醜い」とは言いません。エトゴは、今ではとても幸せです。